花が咲き誇る丘で

県立伊集院高等学校　二年
野上夏鈴

ドアが開き、女性が入ってくる。彼女は花の香りに包まれていた。
「あの、初めまして」
「初めまして、どうぞ座ってください」
「はい、友人にここは痛くないって聞いてきました」
「ええ、そんな風に言われているみたいですね。症状はいつからですか」
「五年前からです」
「そうですか。どこに咲きましたか」
「腕に一輪」
「分かりました。それでは見せてください」
「はい」
と言って女性は右腕を見せた。咲いていたのは小さなスミレだった。
「何かいいことありましたか」
「えっ、どうしてですか」
「あなたの腕に咲いているスミレの花言葉には『小さな幸せ』という意味があるので」
僕がそう言うと、彼女は嬉しそうに、
「最近子猫を飼い始めたんです」
と言った。彼女は猫が大好きで、一人暮らしをきっかけに、飼い始めたのだそうだ。
「それは良かったですね」
「はい、とっても可愛くていつも癒されてます。ところで、先生は花言葉に詳しいんですか」
「ええ、ある程度は。この病気は気持ちによって咲く花が変わりますから、少しでも気持ちが軽くなればとこうやって話を聞いているんです」
「確かに気持ちが楽になりますし、嬉しいことを共有できるのって良いと思います」
「そう思っていただけると僕も嬉しいです。それでは摘んでもいいですか」
「はい」
手袋を付けると、咲いているスミレの周りに薬を塗る。この薬を塗ることで花が摘みやすくなるのだ。その後、スミレの茎を持ち、そっと摘む。摘んだスミレを試験管の中に入れる。
「終わりましたよ」
「すごい、本当に痛くなかったです」
「それは良かったです」

「今まで通っていたところ、摘まれるときにけっこう痛かったので次からここに通います」
「分かりました。摘む人によって差が出やすいので、合わなかったのかもしれません。では、また来月。お大事に」
「ありがとうございます」
　と言って女性は診察室を出ていった。新しいカルテを作り今の女性の症状を記入する。終わったところで、看護師に次の患者さんを呼ぶように指示をした。
「こんにちは」
　と言って、次の女性が入ってきた。椅子に座るよう促す。いつも元気な患者さんなのだが、調子が悪そう。
「こんにちは。顔色がすぐれないようですが、大丈夫ですか」
「体がだるくて、たまにめまいがするのよ」
「そうですか、いつからですか」
「花が咲き始めたぐらいからだわ」
「今月はどこに咲きましたか」
「背中に五輪」
　と彼女の言葉を聞いた僕は、焦っていた。五輪はかなり危ない本数だからだ。
「分かりました、見せてもらいます」
「ええ、どうぞ」
　女性の上着をめくる。すると紫色のクロッカスが咲いていた。この病気の花は人に咲くとき、僕たちが目にするものよりも一回りほど小さくなる。
「摘みますね」
　と言って、手袋を付け、さっき使った薬よりも少し強めの薬を周りに塗る。数分ほどおいて薬がなじんだら一輪ずつ丁寧に摘む。三輪以上咲いている場合は、少し強めの薬でないと摘みにくくなってしまう。
「終わりましたよ。どうぞ横になってください」
　摘んだクロッカスを試験管に入れる。そして彼女を近くのベッドへと連れていき、寝かせた。
「ありがとう。咲いていた花は何だったの」
「紫色のクロッカスでした。この花言葉は『愛したことを後悔しています』という意味なのですが、最近何かありましたか」
　と聞くと、彼女は一瞬驚いた顔をして、
「先週、付き合っていた人に別れようって言われて。結構長かったのよ」
　とぽつりと言った。
「そうだったんですか」
「彼のこと吹っ切れたと思っていたんだけど。やっぱり心情に影響されるのね」
「そうみたいですね」
「ありがとう、話聞いてくれて」
「いえいえ、少しでも気持ちが楽になったのなら良かったです」
「ええ、前向きに考えて、いい人を見つけようかしら」

「いい考えだと思いますよ。前向きに考えることは良いことですから。時間があるようでしたら少し眠っても構いませんよ」
「あら、いいの」
「大丈夫ですよ。三十分ほどしたら起こしますので」
「分かったわ、ありがとう」
　と言うと、彼女はすぐに眠りに落ちていった。それを見届けると、さっき摘んだ二つの花がそれぞれ入った試験管を持ち、ある場所へと向かう。そこは、今まで摘んだ花が保管されている場所だ。ドアを開け、持っている試験管を試験管立てにさし、花が無くなっていないかを一通り確認して、足早に出る。花を腐らせないために、室内の温度を低く設定しているので、とても寒いのだ。今の患者さんのカルテに今回の症状と話してくれた内容を記入する。時計を見ると三十分ほどたっていたので、彼女を起こしにいく。肩を軽くたたくと、彼女はゆっくり体を起こした。
「……ふぁ、起こしてくれてありがとう」
「いえいえ、体調はどうですか」
「ぐっすり眠ったから、だいぶ良くなったわ」
「それは良かったです。それでは、また来月。お大事に」
「ええ、また」
　と言って診察室を出ていった。残りの仕事を済ませて病院を出る。家に帰り、昨日スーパーで買っておいた鶏肉と野菜を炒めて簡単なおかずを作り、遅い夕食を食べる。この仕事に就いてから一人暮らしをしているため、家事は一通り出来るようになった。食器を軽く洗い、食洗器にセットし食器用洗剤を入れてスイッチを押す。風呂に入り、ベッドに横になるとすぐに眠りに落ちていった。
　次の日、目を覚まし、カーテンを開けるとまだ薄暗かった。だいたいいつもこの時間帯に起きる。顔を洗って、キッチンに行き朝食を作る。今日の朝食は、ご飯、味噌汁、鮭だ。食べ終わると、朝食の残りと簡単なおかずをつめてお昼の弁当を作った。その後、まだ家を出るには余裕があったので、ミルでコーヒー豆をひいた。
　ペーパーフィルターをサーバーに付けて、ひいた豆を入れ、お湯を注ぐ。コーヒーの良い香りが漂う。この香りが好きで、ひそかな楽しみなのだ。カップに注いで、テレビをつけてニュース番組を見る。このカップは去年イギリスに旅行にいったときに買ったもので、お気に入りだ。テレビでは有名な女優が背中に十輪以上咲かせて死亡していたというニュースが流れていた。花は咲く本数が増えるほど、本人から奪う生命力も増えてしまう。一番厄介なのは、寝ている間に多くの花が咲いてしまい、激痛に起きるも間に合わなかった場合だ。たぶんこの女優も、そうだったのだろう。コーヒーを飲み干し準備をして、病院へと向かう。着くと、着替えて診察室へと行き、薬など必要な物を準備する。出来たところで、看護師に患者さんを呼んでもらう。
「こんにちは」

と言って入ってきたのは、小学生の女の子だ。後から母親もやってきた。
「こんにちは、どうぞ座ってください」
と言い、二人を椅子へと促す。母親はここの患者さんだが、女の子は初めてだ。
「お母さんは確かまだ一か月経っていなかったはずですが、早めに咲いてしまいましたか」
「いいえ、今回は私ではなくて娘なんです」
「そうなの。わたしね、からだにおはながさいたんだよ」
「そうなんだ。初めて咲いたのかな」
「うん。このまえ、おふろにはいろうとおもって、ふくをぬいだらちくってしたの。それでおなかをみたらね、おはながさいてたの」
「うん、分かった。ありがとう。お母さん、娘さんは花が咲いた後体調を崩したりしませんでしたか」
「花が咲いた次の日に、熱が出ました。一日休んだら下がりましたよ」
「分かりました。ねえ、お花見せてもらってもいいかな」
「うん、いいよ」
と言ったので上着をめくろうとすると、女の子が自分で上着をめくった。僕が少し驚いていると、
「こら、何してるの」
と母親が慌てて、窘める。
「なんで？　せんせい、わたしのおはなみたいっていったからみせてあげたんだよ」
「服は先生がめくってくれるから自分でめくらなくてもいいのよ」
「そうなの」
「大丈夫ですよ、お母さん。今までにここを受診してくれたお子さんの中にもこうやって見せてくれる子がいましたから」
「そうですか。すみません」
「いえいえ。見せてくれてありがとう」
「どういたしまして」
と女の子は嬉しそうに言った。女の子のお腹には、ジャスミンが二輪咲いていた。花と女の子を交互に見た僕は、思わず微笑んでしまった。
「あの、どうかされましたか」
「すみません。ジャスミンの花言葉には『愛らしさ』という意味があるのでぴったりだなと思って」
「あいらしさってなあに、おかあさん」
「かわいいってことよ」
母親の言葉を聞いた女の子は少し頬を赤く染めた。
「ねえ、お花摘んでもいいかな」
「えっ、おはなとっちゃうの」
「うん、取らないとまたお熱出たりするからね」
「……はぁい」

ちょっと悲しげな表情になってしまった。心の中でごめんねと思いつつ、手袋を付け、薬を塗り、花を摘む。摘んだジャスミンは試験管に入れる。
「はい、終わったよ。そうだ、頑張ったご褒美に」
と、引き出しからシールを取り出して女の子に渡した。女の子は受け取ると、嬉しそうに笑った。
「それでは、また来月。お大事に」
「ありがとうございました」
母親は女の子と手をつないで診察室を出ていった。
この後も三人の女性の花を摘み、入れた試験管を保存している部屋に持っていった。今日は午前中で診察は終了なので、午後はゆっくりできる。着替えて病院を出て、一旦家に帰ろうとしているとスマホの着信音が鳴った。画面には、高校のときの友人である裕太と表示されていた。
「もしもし」
「よっ、久しぶり。今暇？」
「うん、どうしたの」
「今プチ同窓会しようって話になったんだけど来れねぇかなって思ってさ」
「いけるよ。でも一旦家帰ってからでいい？」
「おっ、マジ！　分かった。じゃあ、電話切ったら店の場所送るわ」
「了解」
と言って切ると、すぐに店の場所までの地図と店の写真が送られてきた。裕太が決めたのだろう、彼らしい店のチョイスだ。家に帰りシャワーを浴びて、外出用の服を着る。バッグには必要最低限の物と、ポーチを入れる。このポーチには手袋と塗り薬、摘んだ花を入れるための袋が入っている。もし花が咲いている女性にあったときのために、出かけるときはいつも持っていくようにしている。家の鍵をかけ、店へと向かう。道を歩いていると、一人の女性とすれ違った。そのとき、強い花の香りがして反射的に振り返ったが人混みにまぎれて見つけられなかった。強い違和感を覚えたが、それには気づいていないふりをして少し先に見えている店へと足を進めた。
店に入ると、僕以外の席は埋まっていて、裕太の他にも懐かしいメンバーが揃っていた。
「お待たせ」
「おぉ、俺たちもさっききたところだから大丈夫だよ」
「そうなんだ」
と言いつつ、空いている席に座る。店員がきたので、それぞれ飲み物と料理を注文する。待っている間、近況や高校のときの話で盛り上がった。話が一段落したところで、料理が運ばれてきた。僕はこのお店で一番人気だというハンバーグセットを頼んだ。みんなボリュームのあるメニューを選んだようだ。一口大に切って口に運ぶと程よい肉汁と肉の旨味が口いっぱいに広がる。凄く美味しい。今度はご飯と一緒に食

べると、ご飯の甘みも加わり、さらに美味しくなった。すると、
「俺のから揚げ一個やるから、一口くれよ」
と、裕太がから揚げを一つ皿の上にのせた。
「先にされたらあげるしかないじゃないか」
と小さく溜息をつき、裕太の皿に少し大きめに切ったハンバーグをのせる。
「やった。サンキュ」
と嬉しそうに食べた。裕太は昔からこういったことが得意で、友人のおかずなどをもらっていたのだ。これを見ていた友人たちは茶化した後、自分たちも交換しあっていた。食べ終わるとカラオケにいこうという話になり、近くのカラオケ店に入って二時間ほど歌った。カラオケにいったのは久しぶりだったし、裕太やほかの友人とデュエットをしてとても楽しかった。その後はお開きとなり各自家へと帰っていった。家に帰り風呂に入った。お湯につかっていると、ふとすれ違った女性のことが思い浮かんだ。風呂からあがってベッドに入り眠りにつくまで、頭から離れなかった。

＊

花畑の中で小さな男の子と女の子が座っておしゃべりをしている。
『ねえ、もしおはながわたしのからだにさいたらどうする？』
『ぼくがつみとってあげる。そのびょうきをなおすくすりもつくるよ』
『ほんと！　ありがとう。やくそくね』
そう言うと女の子は小指を差し出す。男の子は自分の小指を彼女に絡ませて指切りをした。
『うん、やくそく』
二人は互いに顔を見合わせてふわりと微笑んだ。

＊

いつもより早い時間に起きた。いつもあまり夢は見ないのに、夢も見た。頑張って思い出そうとしたが、花畑の風景が浮かぶだけだった。リビングにいき朝食を済ませ、ある友人に電話をかける。
「もしもし。ごめん朝早くに」
「大丈夫。少しゆっくりしてたところだから。どうした」
「今日の午後、時間ある？」
「うん、大丈夫だけど」
「良かった。ちょっと相談したいことがあって」
「分かった。僕がそっちにいったほうがいい？」
「いや、僕がいくよ。十三時でいいかな」
「了解。また後で」
「うん、また」
と言って、電話を切りコーヒーを淹れる。テレビをつけて今日の天気を確認する。飲み終えると準備をして傘を持ち病院へと向かう。車を駐車場へと停め、診療室へと向かう。今日はどんな花に出会えるだろうか。

今日きた患者さんは五人。カスミソウやスズランなど、綺麗で可愛らしい花ばかりだった。午前中で診察を終え、外に出ると、雨が降っていた。傘を差し、駐車場へと向かい車に乗り込む。基本的に徒歩でいくが、何か用事がある場合は車で行っている。病院を出ると、製薬会社へ向かった。三十分ほどで着いたので、予定の時間より少し早かったが、友人は快く迎えてくれた。友人の名前は翔。ここに勤めていて中学からの付き合いだ。客用の部屋に通された僕は、椅子に座ると一度深呼吸をして話し始めた。

「僕一つ考えていることがあって。今日はそのことで相談があったんだ」

「そうなんだ。それで考えていることって」

「それはね、『花咲病』を治す薬をつくりたいんだ」

「……なるほど。確かに治せたら、女性たちはとても助かるだろうね」

「うん、無茶かもしれないと分かっているけど、もう僕みたいに大切な人をこの病気で失う人を見たくないから」

僕は小さい頃に母親をこの病気で亡くしている。そしてその後、事故に遭い、母親が亡くなる前の記憶を一部失っていた。僕は、自分みたいな人を少しでも減らすために、この仕事に就いた。

「確かに、この病で失うものって大きいからね。それで何か案はあるのかい」

「えっ、協力してくれるの」

「もちろん。僕も同じ気持ちだし、『花咲病』を治す薬というのに興味がわいたからね」

「ありがとう、翔。僕は今までの患者さんから摘んだ花を試験管に入れて部屋に保存しているんだ」

「なるほど。今度君のところにいってその花を見せてもらってもいいかな」

「うん、なるべく早いほうがいいと思う」

「分かった。僕はこの後少し用事があるから、今日はこのぐらいで失礼するよ」

「うん、ごめんね。わざわざありがとう」

「大丈夫だよ。一緒に頑張ろう」

「うん」

会社を出ると、遅めの昼食を済ませ家に帰った。

それから僕たちは、いろいろと話し合って、摘み取った花を一から調べて成分を分析するなどして研究を重ねた。木々の葉が美しく赤や黄色などの色につつまれる頃、試作品が出来上がった。

今日は、診療室にその試作品を持っていき、患者さんの花を摘んでいた。看護師に次の患者さんを呼ぶように指示をすると、女性が、

「こんにちは」

と入ってきた。彼女を見て、僕は驚いた。なぜなら、前に店の近くですれ違った女性だったからだ。

「こんにちは。どうぞ座ってください」

と言い、椅子に座ってもらう。
「初めての方ですね。お名前を確認したいので、言っていただけますか」
「咲野怜です」
その言葉を聞いたとき、一瞬動きが止まった。何か大切なことを忘れている気がするのに、何も思い出せない。一度深呼吸をして気持ちを落ち着かせると、発症した年や今どこに何が咲いているのかを聞いた。見せてもらうと、左腕にピンクのポインセチアが二輪咲いていた。
「薬を塗ります。少しひんやりとしますよ。塗り終えたら摘みますね」
「はい」
手袋を付け、薬を塗り、摘む。二輪とも試験管の中に入れる。
「終わりましたよ。ところでピンクのポインセチアの花言葉ってご存知ですか」
「確か、『清純』じゃないですか」
「ええ、当たりです」
「この病気になってから、花に興味を持ったので花言葉とかも調べているんです」
「そうなんですね。また来月も来られますか」
「はい」
「じゃあ、花言葉の話でもしませんか」
「いいですね。ぜひ」
「分かりました。ではお大事に」
「ありがとうございました」
と言って、診療室を出ていくと、少しして次の患者さんが入ってきた。
「こんにちは先生。この前、綺麗な紅葉を見つけたのよ。それで押し花にして栞にしたんだけどいるかしら」
「いいんですか。本を読むのが好きなのでありがたいです」
「それはよかったわ。はいどうぞ」
と椅子に座って、バッグからその栞を取り出して渡した。
「大事に使わせていただきますね」
「私好きな花とかを押し花にして栞を作るのが趣味なのよ」
「それはいい趣味ですね」
と言うと、彼女は嬉しそうな顔をした。症状を聞くと、腰にガーベラが一輪咲いているのだそうだ。処置が終わると、
「私、最近良いことがあったの」
と、新しくできたという彼氏の話をし始めた。失恋で傷心状態のときにいつも話を聞いてくれたり、気分転換にお出かけに誘ってくれたりしたそうだ。
「それは、良かったです。あの一つ相談したいことがあるのですが」
「どうしたの」
「僕、友人が勤めている製薬会社と協力してこの病気を治す薬の開発をしていて。試作品ができたのですが、誰か試してくれる方を探していて」

「そうなの、私試してもいいかしら」
「治らないかもしれないですし、副作用が出るかもしれないので危ないですよ」
「分かってるわ。でもこれで何か分かれば完成に近づくし、体調が悪くなったら先生に連絡するわ」
「はい、本当にありがとうございます。気を付けて使って何かあったらすぐに連絡を」
「分かったわ、それじゃあまた」
「はい、お大事に」
試作品の説明と使用方法を聞き帰っていく彼女を見送った僕は、心配と不安の気持ちでいっぱいだった。
それから五日後、彼女から連絡がきた。
「使って最初のほうは何ともなかったのだけれど。次第に吐き気と頭痛がして。あと軽い発疹も出ているわ」
「本当に申し訳ありません。すぐに使用を止めて安静にしてください」
「分かったわ」
「さらに症状が悪化した場合はまた連絡をください。お大事になさってください」
「ええ、ありがとう」
電話が切れると、すぐに翔に電話をする。
「もしもし」
「どうした」
「試作品を試してもらってた女性に副作用が出た」
「どんなの」
「頭痛と吐き気、あと軽い発疹」
「分かった。今日来れるか？　あと摘んだ花も持って」
「うん、行ける。夕方になるけど」
「了解。じゃあ、また」
「うん」
電話を切ると、その後も四人の治療をした。夕方になり、翔のもとに向かって、副作用が出た原因や、無くすあるいは少なくする方法を模索した。話し合った結果、試作段階だったため体に合わず過剰に反応してしまったのだろうという結論が出た。
その後も試行錯誤を繰り返して試作品を作った。長く僕のところに通ってくれている方や最初に試してくれた女性も副作用に苦しんだだろうに協力を申し出てくれて、様々なデータが集まり、研究も良い方向に向かっていた。
ついに治せるかもしれない薬が完成して一週間ほどたったある日、もう夜も遅い時間に看護師が、
「先生救急です！　背中にバラを十二輪咲かせていて、容体はとても悪いです」
と走ってきたので、急いで患者さんのもとへと向かう。十輪以上咲くと危ないのに、よりにもよってバラだなんて。バラは、咲いた女性の生命力を奪うため一番危険な花なのだ。患者さんのところに着いた僕は、大きく目を見開いた。なぜ

なら、彼女は怜さんだったからだ。看護師に道具を持ってくるように指示をして、怜さんのもとへ駆け寄り、
「大丈夫です。今から花を摘むのでもう少し頑張ってください」
と声を掛け、道具を受け取るとすぐ処置に移る。背中に部分麻酔を打って、強い薬を塗り摘んでいく。摘んでいる最中に怜さんの、
「もういいよ、あっくん」
という声が聞こえた。顔を上げると彼女は泣いていた。そのとき全部思い出した。僕をこのあだ名で呼ぶのは彼女だけだから。僕たちは、小さい頃に一緒に遊んでいて、よく花言葉のクイズをしていた。母が亡くなる一週間前に急に引っ越すことになり、それ以来会っていなかったのだ。
「……君は小さいときに遊んでいた怜ちゃん？」
「うん、そうだよ。やっと思い出したね」
「ごめんね、君が引っ越した後に母さんが亡くなって。その後事故に遭って。そのときに母さんが亡くなるより前の記憶が少し消えたんだ」
「そうなんだ」
彼女の声はだんだんと小さくなり、誰が見てももう手遅れだった。
「私ね、ずっと伝えたいことがあって。それはね……」
「まだ言わないで」
僕は、彼女の言葉を遮り、彼女の目をじっと見つめた。僕はまだ諦めない。
「君がちゃんと元気になったら続きを聞くから」
僕は薬の入った注射器を手にする。
「それは何」
「これにはこの病気を治せるかもしれない薬が入ってる」
「あのときの約束覚えててくれたの」
「記憶は完全に消えたかもしれないけど、どこかに治す薬を絶対に作らないといけないっていう想いが残ってたんだと思う」
「そうかもね」
「強い副作用が出るかもしれないし、治らない可能性だってあるけど、この薬を打ってもいいかな」
彼女は、こくりと確かに頷いた。
「大丈夫。私は負けない」
「分かった」
彼女の右腕の二の腕部分をアルコールを含んだ脱脂綿で拭くと、薬を打った。すると彼女は、眠りに落ちた。病室に運んで、点滴を刺し、後は目覚めるのを待つだけだ。彼女に咲いていたのは、『白いバラ』だった。白いバラの花言葉は、『約束』。診療室に戻ると、カルテに症状などを書き込む。家に帰り、ゆっくりと風呂につかる。大きく息をはく。彼女は僕に自分のことを思い出してほしくて白いバラを咲かせたのかも

しれない。風呂からあがると、髪を乾かしてベッドに潜り込む。すぐに眠りに落ちた。

いつものように治療が終わり、花は試験管に入れる。小さいが彼女には花が咲き続けている。帰る準備をしている彼女に、

「今度の日曜日時間ある？」

と話しかけると、

「うん、その日は一日暇だよ」

と予定を聞かれたのが不思議だったのか首をかしげながら答えてくれた。

「じゃあ、花畑にいかない？」

彼女は一瞬驚いた顔をしてすぐに大きく頷いた。時間などを決めると、彼女は嬉しそうに帰っていった。小さい頃いつも遊んでいた小さな丘を僕たちは花畑と呼んでいた。立ち上がって窓を開ける。彼女が言いかけていた言葉を僕から伝えたら、彼女はどんな反応をするだろうか。想像してみたら、笑みがこぼれた。風にのり飛んできた桜の花びらが手のひらにのる。深呼吸をすると、優しい春の香りが僕の胸を満たしていった。